

## 論 文 要 旨

北東アジア国際関係の「不安定要因」とされる「北朝鮮問題」を平和裏に解決するためには、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を冷静に分析し、予断や当為なくその意志と論理を理解すべきである。そのために北朝鮮の行動と態度の理解には、原則＝指導思想の解明が必須である。

本博士論文（以下、本研究）は、北朝鮮における指導思想の核心である主体思想の政治史的な解明を課題とした。具体的には、主体思想の形成と展開を金日成の抗日闘争期にまで遡って跡づけるとともに、それがなぜ北朝鮮において誕生し、必要とされたのか、具体的な内容は如何なるもので、北朝鮮の政治・外交、経済・社会・文化の内実のなかでどのように理解されるべきものであるか、さらにこの思想が国家にとってどのような意味を持ち、国民に如何に教化され、どのような手法で国民に内面化されていくのか。加えて、主体思想が「北朝鮮」の思想であるという特質はどのような点に認められるのか、ということが明らかにすべき課題となる。

序章（問題の所在）では、まず北朝鮮の行動と態度の理解には、原則＝指導思想の解明が必須であると述べて、本研究の背景を明らかにした。次いで、本研究の意義を学術的に位置づけるべく先行研究の紹介と検討を行った。そこでは、本研究が北朝鮮研究の立場に立脚しつつ、主体思想の政治史的解明を目指していることから、とくにこの領域で研究蓄積が際立つ日本と韓国の北朝鮮政治研究、北朝鮮思想研究、主体思想研究を中心に研究状況を浮き彫りにした。本研究はとくに北朝鮮における「主体」の提起の持つ意味とそれが指導思想に昇華する過程と論理、そして形成されていった指導思想が国民に如何にして教化され、それが貫徹される領導芸術の手法、これらを含む朝鮮的特質の抽出を軸に、「主体思想とは何か」の解明を試みる研究としての独自性があることを明らかにした。加えて、本研究は政治学と歴史学の研究方法に依拠しつつ、文献研究に現地調査で得た情報を加味する方法を用い、従って序章と終章、本論となる5つの章に補章を加えた8章立てとなる構成について明示した。

第1章（主体思想の形成背景）では、主体思想の形成背景となる朝鮮半島の解放から金日成の下で国家社会主義体制が成立するまでの北部朝鮮・北朝鮮政治史の展開を概述した。そこでは、まず解放による権力の空白と南北に分離してソ連軍が進駐する状況の中で、金日成が如何に北部朝鮮において党権のイニシアティブを形成していったのかを明らかにした。次いで、米ソの信託統治が破綻し、朝鮮半島の南北とともに政権機関が創設されていく中で、この段階では金日成が海外から帰国した共産主義者らの支持を基盤に人的優位を図りつつ、北朝鮮労働党と政権機関内で権力の足場を築いていった過程を明らかにした。またここでは、指導党の確立途上で国家を形成せざるを得なかった脆弱性も指摘した。続いて、朝鮮戦争の勃発と国際内戦へと至る展開、そして停戦が模索される状況の中で、金日成は人民軍最高司令官としての自己の責任を巧みに糊塗し、戦争が難局に差し掛かれれば

差し掛かるほど、金日成を中心とした体制に結束しなければならないように党の組織を改編して、逆に権力基盤を固めることに成功した過程を明らかにした。そうして、金日成は主要政治勢力の有力者の排除、国内パルチザン派の取り込み、1956年の8月全員会議におけるソ連派・延安派の一扫とこれに対する中ソとの妥協、全社会の社会主義的改造と党優位の制度改変を経て、朝鮮労働党と党を後衛する朝鮮人民軍、北朝鮮内閣、最高人民会議常任委員会の一体化という北朝鮮の国家社会主義が金日成の政治権力の下で完成されていた過程を整理した。

第2章（「主体」の萌芽）では、主体思想がなぜ「主体」の思想でなければならなかったのか、また「主体」という言辞の内容とその言辞が選択された意義について解析した。「主体」を構成する根源的な内容は、植民地期に朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」感情から生じ発展したものである。そこでの主体は、事大を克服するための愛郷・愛国であるがゆえに、事大と対をなす「主体」でなければならなかった。

第3章（主体思想の形成と展開）では、主体思想の形成と展開の過程、そしてその内容を考察した。そこでは、まず主体思想の創始をめぐる問題について検討を行った上で、主体思想の形成過程を時系列に追い、その構成内容を跡づける形の論述とした。そこで明らかになったのは、主体思想が大きく四つの段階を通じて、形成と発展を遂げてきたということである。主体思想自体は第三段階までに確立され、第四段階でその展開が図られることになった。この過程において、金日成自身の経験的ナショナリズムと権力闘争の中で活用可能性が見出された国内の民族主義的土壌、金日成を取り巻く派閥的な権力闘争、廢墟からの社会主義建設、対外的な影響力への対処と中ソ関係という政治社会的な諸条件の中で、金日成の絶対的な権力が確立し、彼が導く路線が主体という言辞で語られ、従来依拠し続けてきた対象からの離反により、「主体」思想が北朝鮮において必要とされ、成立した。

第4章（主体思想の朝鮮的特質）では、しばしば主体思想の形成に対して影響を及ぼしたと主張されるマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を検討の材料として取り上げ、主体思想が「北朝鮮」の思想であるという特質、すなわち主体思想の朝鮮的特質の析出を行った。主体思想では、外在的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることが重視され、また内部的には分裂を阻止するための判断・決定権を得ることが重視される。そうした行動と態度を規定する思考が、思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛と自主独立外交として一括される、主体思想の朝鮮的特質である。また、主体思想は自らが何を選択するかを第一に重要視し、選択されたものを自らが判断・決定して進めることを第二に重要視する行動と態度を規定する思考であるがゆえに、その範疇外のものを捨象して、自ら重要視されるものだけを強調するという特質もまた有している。

第5章（主体思想の教化）では、主体思想を具現化するための技術の一つであるとされ、人民大衆を動かす方法だとされる領導芸術の一端を明らかにすることを通じて、主体思想がどのように教化され、また如何なる手法で国民に内面化されていくのかを分析した。そ

ここではまず、党・国家が進める革命と建設からその構成員が離れられないように張り巡らされた「単位」への所属と「組織生活」の概要、そしてその下での教養体系を紹介した。その上で、5つの教養を中心として学校教育段階での教養を、また金日成の回顧録を手がかりに、学校教育段階以降の教養の内容と論理展開について分析した。これらの教養は、党員として、また勤労者・農民としての革命実践の見本を示すものであり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現するための方法を提示している。これらが逸脱を許さない組織的な集団生活の中で、日常的に繰り返し刷り込まれるとともに、日々実践を求められる。こうして、北朝鮮の人びとは、党や国家が教養を通じて求める精神を察知し、これを取り込んで内面化させていくのである。

そして最後に、筆者が行った現地調査の結果に基づいて構成された補章（北朝鮮の生命力）で、主体思想の生命力、すなわちなぜ主体思想が50年余りに涉って生き長らえられているのかということの一端について検討を行った。そこで明らかになったのは、主体思想のかなり幅を持つ側面と非妥協的な側面である。主体思想は、立場によって柔軟な解釈が可能な余地と、その思想のどの面を切り取り自らの思考や行動で活用するかによって、その人の思考や行動が大きく変わり得るという可変性を有している。また、指導者を絶対視し、その判断・決定に関わることの無謬性、また対外的な指導者の自主選択権の尊重と内部的な判断・決定に関わることの遵守への非妥協性を心得れば、それを踏み越えない領分であれば、主体思想の幅広い解釈の中に含まれるという特性を持つ。これが主体思想の生命力を高めている。

以上の論述から、次のような結論が導出できる。すなわち、主体思想の形成と展開を金日成の抗日闘争期にまで遡って跡づけてみると、その土壌が朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」感情が植民地植民地期を通じて生み出してきた二分法的な思惟と金日成らの革命経験によって作り出されてきたものであるということが分かる。解放後、朝鮮半島が南北に分断され、ソ連軍が進駐してきた政治空間で、ナショナリズムを胚胎させたまま、限られた資源を用いて社会主義建設を行い、権力闘争を勝ち抜いた過程で金日成が自覚したのは、依拠すべき方向が教条主義と形式主義に反対し、事大を克服して、先述の土壌を活用することだった。それはあくまでこれまでの経緯により、朝鮮人民の朝鮮人民による朝鮮人民のための朝鮮革命でなければならないことから、事大の対概念としての「主体」という言辞でなければならず、それが金日成らの抗日闘争を通じた権力正当化と共鳴したために、北朝鮮で誕生することになった。また、このような「主体を打ち立てる」という思考と行動が、従来依拠し続けてきた対象からの離反に直面したとき、「主体思想」という外皮で覆うことが必要とされたのである。そしてそれは、北朝鮮の政治・外交、経済・社会・文化の内実の中では、指導者を含む構成員すべてが日々の生活や活動の中での思考方式を規定する価値判断の基準として理解されるべきものである。さらに、この思想は国家にとって、指導者・党のレベルでは、外在的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることが重視され、また内部的には分裂を阻止するための判

断・決定権を得ることが重視されるという意味を持ち、人びとのレベルでは、指導者を絶対視し、その判断・決定に関わることの無謬性、また対外的な指導者の自主選択権の尊重と内部的な判断・決定に関わることの遵守を心得るといふ、自らを拘束する最低限の指針としての意味を持つ。このような行動と態度を規定する思考とともに、自らが何を選擇するかを第一に重要視し、選擇されたものを自らが判断・決定して進めることを第二に重要視する行動と態度を規定する思考であるがゆえに、その範疇外のものを捨象して、自ら重要視されるものだけを強調するという側面は、主体思想の朝鮮的特質でもある。加えて、以上のような主体思想は、あらゆる人びとが「単位」に所属し、「組織生活」が営まれている包括的な体制下で、学校教育段階に始まり、成人段階での各家庭が束ねられた人民班単位での生活や職場生活を通じて体系的に施される教養事業の手法により、5つの基本的な教養内容によって教化される。